

——長生きも芸のうちとやら、だからだとまだ生きちよります。すると、周りの旧友らがどんどん先だつてゆき、孤独感が深まるという、残酷な人生の仕掛け。老人ならではの虚無感との戦いの日日です。——

と、嶋岡晨さんから葉書が届いた。旧友とはもちろん、この一月に亡くなった片岡文雄さんのことである。片岡さんは一歳年上の嶋岡さんのことを「兄貴分」といつもいつていた。だから、弟分の片岡さんが亡くなったことは心のなかにドサツとくするものがあつただろうと、ふたりの交友を遠くからのぞき見していたばかりにはそうおもわれる。

そんな嶋岡さんのあたらしい詩集『洪水』（洪水企画）は、遺書といつてもいいような装いをして、間近に迫っている死にたいして含み笑いをしているような作品がおおかつたが、その反面、「老いの力の在り方」を言葉で実践しているさまが、ネオ・ファンテジスム（新幻想主義）やネオロジスム（新造語主義）、オクシモロン（形容矛盾の撞着語法）などを駆使して個人の内面性を重視してきた嶋岡さんの姿が浮き彫りにされている力強い一冊でもあつた。

いままら、遺書めいている、といつてみても、嶋岡さんの第一詩集は『青春の遺書』である。もつともそれは嶋岡さんの「青春」の終焉を意味するもので、人生を意識的に生きる人間はだれしも「青春」を葬るものであるというような謂で、八十二歳の嶋岡さんが直面している「遺書」とは意味合いが違うとはおもうが、ほくにしてみれば、「嶋岡晨」はいつまでも「青春」であり、おびただしい魂を埋めた大地からよみがえってくる過

も精力的に書いていて、三一書房なんかから小説集も出してた。そのころの蓄積が後年、二度にわたる芥川賞の候補作に結実するのだが（候補になつたときほくは、受賞せよ、と念力を送っていたのだが）。

その当時もいまま、高知で出しているさまざまな文芸誌の紹介を高知新聞は「ローカルジャーナル」という名目で紹介してくれる。このstageも出すたびに紹介してくれている。まあ、数人の作者名と作品名が載り、たぶん係りのひとの気になったであろう詩の部分引用がされるぐらいである。いまではそんなふうで紹介程度だが、昭和40年前後の新聞の紹介はなかなかユニークで、Kさんが署名入り記事で、「嶋岡はこんなふうな小説を書いているがこんなものを書いてつまらん」というような（文章の詳細は忘れてしまったが）ダメ出しの紹介文を書いたりしていた。いまでは考えられないことである。高知新聞もむかしはなかなかユニークだった。杓子定規的でなくて楽しかった。

それにまだ昭和40年ごろというと、詩や小説、いわゆる文芸（こんな言葉はどうもなじめないのだが）が世間のあいだでもなんらかの有効性を持っていた時代で（現在は漫画がとつてかわつていようにおもえる）月一回ぐらいのペースで、片岡文雄さんやそのほかの高知で詩や小説を書いているひとが書く、高知の文芸事情といったような展望評論が載っていた。かれら独特の厳しい語り口で。それも文芸欄の半分以上の分量で。

いまでは、親しい新聞記者にも「読者は大家さんの文章を必要としていないから」といわれたりして、おとつとつとつ、じゃ、おれに書けなんていつてくるなよ、とおもつたりするのだが、

去の栄光と汚辱を切りはらつて、別れを告げるものであつても、再生は常に用意されている、とおもつてしまふのだが。

嶋岡さんが死ぬことは想像できない

高知、窪川町出身の嶋岡さんは昭和38年（31歳のとき）から6年間、家族の看病のため高知に帰郷していて、その間はほくの通つていた高校で国語の教師をやつていた。（高校三年のとき、不覚にも嶋岡さんの授業を受けてしまうのだが）。

それと同時に、地元高知新聞の投稿詩の選者をやつていた。現在は週一回三編の入選作が新聞に載るのだが、当時は月一回三編を入選作としていた。当時20代半ばだった林嗣夫さんも投稿して、林さんが20行を2倍もオーバーした詩を投稿したりしても、嶋岡さんは平然と、林さんの詩を「見事な一編だ」という評とともに入選にし、入選者三人のところを二人にしたりする時があつた。

いまの世間、妙な公平さや平等さが正しいとされているが、正しくないことはいつも魅惑的である。

当時の新聞の編集方針がそういうことをOKとしていたのか、文芸欄の担当のひとが単独でOKとしていたのかしらないが、このひとならそんなことを平然とやりそうだというひとがひとりいた。Kさんという学芸部に長くいた記者で、いろいろエピソードの絶えなかつたひとで、批判されることも多かつたひとだったが、部外者のほくにしてみればユニークなひとで、ほくは氣にいつていた。

高知にいたとき嶋岡さんは『人間像』とか『潜航』といった小説の同人雑誌を出していた。嶋岡さんは詩を書く傍らで小説の一方では変に納得したりしている。最近ほ、すこし立ち止まって、悩んだり、苦しんだり、間違つたり、糞詰まりの状態になつてもがいてみたりする文章よりも、簡単に世情を分析してみせる文章がいいようだ。すこしわかりにくい文章を解き明かすのではなく、漫画のように直線的に理解できるものが求められていようだ。

一年ほど前には、「この文章を載せたら新聞社が訴えられることがあるかもしれませんので」なんていわれて書き直したことがあつた。まあそれはちよつと大仰ないいかたで、記者としては、新聞という器の範疇のなかで書いてほしいという気持ちだつたのだろう。最近はなんのこだわりもなく書き直せるようになった。

最近ほインターネットの普及で、クリックすると、どんな著作物でもその要旨を簡単に検索できる。だから原文を読まなくても、知つたかぶりができてしまう。あるいは、新書版の普及で専門分野のダイジェスト版とか、解説本が出回るようになり、それらを読むことで、さも原本を読んだつもりになることができる。

ほくが育つてきた時代はネットなんてなかつたし、解説本などない時代だったので、ウンウンウンウンいいながら意味のわからない本のページをめくつていた。

それでも、繰り返しかえし繰り返しかえし読んでみると、20代にはわからなくても30代になると霧がかかつたぐらいのわかり方になり、40代になると、ほんやりうつすらと、こんなことをいつてるんじゃないのかな、とおもわれてきて、50代になると、なんとなくわかるようになり、60代のいまは、自分勝手な読みをし

て、それでよし、としている。だから、いろいろなひとの文章を誤読しているかもしれないが（若いころは正確に理解しなければとおもっていたが）、それはそれで他人の文章を読む楽しみだ、とおもえるようになってきた。60代になってやっと、開き直ることができるようになった。でも、J・ラカンの文章はいまだなじめないし、100分の1も理解していないだろうと、自負している。それでもかれの文章を引用するのは好きだ。かれの文章にはこちらの安易な既視感を突き崩してくれるような緊張感がある。

新聞の投稿詩に話を戻すと、ほくも高校一年のとき投稿した。なぜか入選した。次も入選した。次も。投稿すると入選するところがしばしばかしくなり、三回ぐらいの投稿でやめてしまった。

嶋岡さんにしてみれば「大家は下手やけんど、若いき、励ましちやお」というオマケの気持ちだったとおもいますが、ほくは高校一年で、若くて傲慢だったから、投稿したら入選するのはしばしばかしくて、投稿をやめた。

とはいっても、在籍していた高校の文芸部では、高知大学を出たばかりの若い女教師が顧問になって、「大家くん、ペニスとか精液がでてくる詩は学校の機関紙には載せれん」と変なことをい出して、文芸部の機関紙に載せれなくなって（ほんとうは載せて既成事実をつくる手もあったが、新任の女教師を困らせたくなかった）、しかたなく、高校二年のとき、同人雑誌をつくった。

創刊号を出したあと、図書部の顧問をしていて、いつも図書室にいた（たぶん職員室が嫌いだったのだろう）嶋岡さんに雑

誌の感想を聞きにいった。もつとも図書室には伊藤さんという若くてキレイな司書がいて、図書室は文芸部よりも楽しかった。嶋岡さんは青二才たちの雑誌にあれこれアドバイスをくれた。とくに、「言葉は観念だけじゃいかん、手で掴まんといかん」といわれたことはいまでも覚えている。そのことは、嶋岡さんの詩作とともに歩んできたほくには、嶋岡さんの詩作の中心を貫いてきたものだ、50年たつたいまでも納得している。

しかし、若くて傲慢だったほくは、同人雑誌の次号の編集後記に、著名な詩人がこんなことを言ってくれたが、それらは一意見であり、ほくたちはほくたちの道を進もう的なことを書いてたした。

そんなばかばかしい若さを満喫していたほくだが、21歳のとき出した初めての詩集には、嶋岡さんに、「大家よ、常に新鮮に死んでくれ」というこれ以上ない跋文を書いてもらっている。

長々と無駄口を叩いてしまった。嶋岡さんの詩集に戻る。

今度の詩集のなかでは馬がよくでてきて、馬を題材に扱った詩が嶋岡さんの虚無な臨場感を醸し出しておもしろい詩がたくさんあったのだが、ここでは巻頭におかれている「不在の母」を転載させていただく。

ただいま――

小学生の一人息子は玄関にとびこむ

だが母はいない

鏡台の前にも 台所にも 揚げ板の下にも

おかえりの声は ない

半分壊れたラジオの前にも

鏡台の前で化粧のまねをし

台所で組板をきざんでみるのは

空腹よりもひもじいものに耐えている

十歳のわたしだ

母はいつもよそ行きの着物すがたで

同じ退屈を抱えた友達の家で

長いおしゃべりを演じ

買物物の道をひき伸ばし

理由のわからぬ淋しさをごまかし

父の不在に對抗している

おかげで ああ アポリネール\*

わたしら詩人の卵は ぞんぶんに学んだ

孤独の復習 言いしれぬ空虚さを

懐かしい遠い声 遠いエプロン姿に 涙をうかべ

ひとり 自分の影とチャンバラをして ごまかし

見えない傷だらけの体を 人けない公園の

停まらないブランコに乗せた

信じられますか 世界中のお母さん

恋愛し結婚し そればかりかたちまち

五十になり 八十にもなった あなたの一人息子が

日暮れの町で迷子になり  
いまだに 涙をこらえ歯を食いしばり  
〈何か〉を探しさまよい歩いていることが。

\*仏詩人ギヨームテポリネールの母も、家に居たがらなかった。

嶋岡さんの詩にしては少々感傷的で情緒的すぎる気がするが、母と子に引き継がれた、いや、ちよつと大仰ない方をすれば、ひとの遺伝子に引き継がれているひととしての孤独、だれにも癒やされることのない、ひとが「知」とともに引き受けざるをえなかった、もうすこし大仰にいうと、ひとという存在が本来的に持っている孤独、かつて、身を覆うものがなく、まっ暗な洞穴で、肉食獣の遠吠えを聞いていたころの、たぶん、そんなむかしの、恐怖をともなつた孤独を、身体と精神に染み込むような孤独を、そんな孤独と通底している孤独を、見つめながら嶋岡さんは、母の孤独、父の孤独、そして、みずからの孤独の姿を書きつける。きつとその孤独は娘さんにもお孫さんにも引き継がれて、孤独という世間のなかで悶々と生きつづけるひと、というカテゴリーのかなしみをしるしていくだろう。

この一冊はこの巻頭詩に代表されるように、嶋岡さんが生まれたときから抱えこんでいた孤独というひとの最終兵器がようやく顔を見せはじめた一冊である。「大家、おまんにも、もうすぐやってくるぜよ」という嶋岡さんの声が聞こえる。

いたましい

たましいの損傷をやわらげるため と称し

他のどの馬よりも 疾駆するため と告げ

自分に鞭をあてつづけ

腹を拍車で蹴りつづける

瀕死の愛の死者の手紙を 裏切り者に

手わたすため

〔走る馬〕三連目

この背にまたがる者は

ついにやってこない

こちよく鞭打つ者は

もういないのか。

〔馬のように〕最終連

かぎりない人生の幻を呑みこみ

ぬるぬる膨張しつづける

おろかなおろち

みずから溶け

くるおしくのたうつ

大蛇のむれだ——高い所から落ち

われわれは別れながら

別れを知らず

たがいのしつぽを食いながら

死の味に気づかない

〔洪水〕一連目

さきほど、むかしの新聞は杓子定期的でなくて楽しかった、

と書いたが、ちょっと簡単に書いてしまったな、と反省しながらおもいかえすことがあった。

いまも高知新聞には「閑人帳」というコラム欄があるのだが、30歳ぐらいのときだろうか、そこに書くことになったのだが、はじめて書いた原稿は、社会的通念から外れている、と突き返され、書き直した分も、その考えは受け入れられない、と突き返され、「あれ、あれ、あれ」とおもいながら、最後はあたりさわりのない文章でお茶を濁し、そういう文章はだれの目にもつまらなさがるもので、三か月でお払い箱になった。

40代のころ、先のKさんから声がかかって、月一回のペースで映画コラムを書くことがあって、それは五年ぐらいつづいたが、おまかな性格のKさんからクレームを受けたことはなかった。

新聞社には基本方針というものはあるだろうが、それを運営していくのは個々の記者だから、こっちの個性とマッチしたら「新聞は杓子定期でなく楽しい」ということになるだけの話だろう。

で、先日、朝刊をばらばらとめくっていると、おとつとつと目がとまった。「新聞を読んで」というコラムで、そんなところはいつもは素通りするのだが、筆者名に目がとまった。本誌で鴻野審というペンネームで書いている竹内くんの名前と写真が目にはいった。それも肩書は「社会福祉法人理事」。高知放送の番組審議会の委員長をやっていることは知っていたが、社会福祉法人でなにやっていたら、と肩書のほうに目が釘付けされた。で、問い合わせたら、なんのことはない、老人ホーム役員を無給でしている、とのこと。「まもなく仲間に入れてもらえるように願ってつとめている」らしい。うーん、そうなの

か、としみじみ。なお、コラムは週一回掲載で、何人かのローテーションで回すらしく、竹内くんは二か月に一回程度らしい。「新聞を読んで」というコラムだから、新聞を読んでの感想

なのだろうが、妙におもしろいコラムになっていた。新聞には、読者投書欄というのがあって、読者の方々の意見を拝聴する、ということを建前としているが、竹内くんは、

橋元良明東大教授のメディア論をもとに、投書欄は、五箇条のご誓文で「万機公論に決すべき」という明治政府が新聞社に民衆の意見を採りあげるように推奨し、新聞社もこれに応え、投書欄を設けたということを紹介している。これにより、「全国規模で庶民感情の共有が進む一助」となったらしい。明治時代、新聞は啓蒙的な役割をしていたことは知っていたが、読者投書欄が明治政府のお声掛かりだったとは知らなかった。

それと同時に、日本人に「倫理観を共有させた」ものとして明治期の新聞に登場した「身の上相談」をあげている。1906年の人生相談が最初だったという。

竹内くんは車谷長吉のファンで、朝日新聞土曜版での人生相談が「風変わり短編小説のような不思議な味わいの口調で、衣を脱いだ人間の本质を説いていた。作家の深く静かな肉声が活字の向こうから聞こえてくるようで次回が待ち遠しかった」と懐かしんでいる。

人生相談といえは、むかし「週刊プレイボーイ」での柴田鍊三郎の人生相談が人気があった。今東光や開高健などもやっていたが、やはり柴田鍊三郎が人気があった。

いま、高知では地元のラジオ局が昼食時の時間帯に人生相談の番組を流している。なかなか聞くことはないが、何年前か、

車を運転していて聞いたことがあった。なかなかハードなアドバイスだった。

「あなたは娘さんとの関係を悩んでいますか、ほんとうはご主人との関係で悩んでいるのではないですか。あるいは、あなたと母親のあいだで確執があって、そのことが娘さんとの関係に影響しているのではないですか」などと巧みに心理学などを駆使していて、まあ、それはそうだろうし、ひととひとの関係は、その背後に抑圧している感情に左右されるのだから、母親の関係は、夫婦の関係、あるいは母親の母親との関係が、無意識の欲望として潜んでいるのだから、それらに言及していくのはしかたのないことだろうが、そうだったら、もう人生相談の30分番組では片づけることのできない領域ではないのか、なんておもいながら、「母親にはなにをやっても認めてもらえなかった記憶がありますし、主人とは寝室が別です」なんて泣きはじめた相談者の声を聞きながら、時間がきたのだろう、司会の男性の声はいつ、「では、まずはご主人との関係を見つめ直すところからはじめてください」とテーマ音楽が重なって番組はおわっていった。

むかしの、柴田鍊三郎のころなどは作家の個性が表に出ていて、柴鍊があんなこといつたらあ、というような、作家の視点が重視されていたようにおもいますが、最近では心理学を駆使しているのか、と聞いたことだった。竹内くんが感心した車谷長吉の人生相談は、柴鍊のように、作家の個性が前面におしだされたものだっただろう。たぶんそれは、車谷長吉が相談者の話のなかに「物語」を作りあげて、そこで展開されている愛憎を車谷長吉の口調で語っていたのではないだろうか。



で、竹内くんのコラムだが、新聞には「人間のにおい」が求められるのではないか、というメダだったが、それはどうしても、記者個人の、個々の個性が文章を人間的にしたり、無機質にしたりするのもだろうとおもう。新聞社だけではない、この世のなか、さまざまな個性のひとがいて、右へぶれたり、左へぶれたりしながら、生きている。そのなかで、人間のにおい、というか、作者の個性を感じさせられるものは魅力的である。そのような詩集二冊を紹介したい。

女のひとの年齢をいつていいのかわからないが、今井好子さんは50歳を過ぎた。50代がターニングポイントだとはいわないがそのくらいの年齢になるとひとときとして、50になるまでに見えていたものと、50を過ぎてから見えてくるものに微妙な差異をみいだすことがある。

その今井さんのあたらしい詩集『揺れる家』(土曜美術社出版販売)は、そんな手触り、心触りの微妙な差異の物語がつづられている。そこでは差異を差異としてそのまま受け入れてしまうことで、差異という「わだかまり」を生きていくことができるのだ、ということが書かれている。

預かりものの中身が気になり そつとのぞくと

飛び出してきたのはウェットスーツだった

男物の黒色の合成ゴム

それは人の形にひろがりだらりと所在なくて

海から離れた小さな私の部屋を埋めた

預かっていたものをあけると、自分がでてきた。それも中身をすっかり処分されて。処分したのは自分なのか、他人なのか、そんな昔のことはすっかり忘れているが、「わたし」がでてきた。そんなふうを読むと、妙に定型的な読み方をしているようで今井さんに失礼な気がしてしまうが、50歳になったわたしはそれまでのわたしとは距離を置いて存在しているような気がする。それがこのウェットスーツだ。男物だと嘘をつくことで、わたしという持ち主はわたしを簡単にひきとる勇気をうしなうことができる。だから、眠れないうつつの夜に「乾いたウェットスーツ」としてカラカラな自分を頭のなかにぶら下げて、優柔不断な幾夜かを過ごしてしまっていた。

そんなある日、バケツを買い求めた今井さんは、「床をでてクローゼットのウェットスーツを抱きしめる」。たぶんそんな瞬間はだれにもあることだし、そんな瞬間を経ることで、「わたし」は「いまのわたし」に一步近づけるような気がする。「強く抱くと柔らかな体は腰のあたりからそり返る」のは、自分の体との官能的な瞬間、忘れていた自分との性的な交歓でうまれてくるかつてのわたし、まだ未成熟で肉体の意味を知りえていなかった時代、そして、不用意に性感の一瞬を感動してしまつたひととき、そんな「自分の一瞬」を知ってしまった。このさき、50を過ぎたわたしはなにを見、なにを見ず、残りの生を生きていかなくはならないのか。これからの未知の世界。買ったバケツの底にさらに底が見えつづけたように、ウェットスーツを取り戻したわたしの行き先は、底の先にさらに底が見えている、そんな不条理ではあるが、生きることを愉しませてくれる世界かもしれない。そんなつばやきがこの一編からは聞こえてきた。

持ち主は一向に取りに来る気配がない  
いや預かって以来全く連絡がない とれない  
ウェットスーツはクローゼットの端でしまっている

うつつのさかいで物音をとらえて

ペランダのバケツと如雨露がすれる音だとわかる

そういう風が吹いているのだ

浮かんできてほしくない思い出が

はいよ はいよと浮かんできて

うつつは眠れない夜にかわる

乾いたウェットスーツまでもが浮かんできて

眠れない夜はますます濃くなっていく

バケツを買いに行った日

あの日も海とは無縁だった

同じ形のバケツが積み重なり

それなのにしばし迷って

バケツの底に底があり 底に底がつらなっていた

ようやく上から三番目を買い求めたのだった

床をでてクローゼットのウェットスーツを抱きしめる

強く抱くと柔らかな体は腰のあたりからそり返り

長い腕がますますたれさがる

ウェットスーツと一對となつて夜の底へ

底から底へ 落ちていく

(ウェットスーツのある部屋) 全篇)

富沢智さんの『乳茸狩り』(榛名まほろば出版)は一読して、富沢さんは、妙にへなちょこな、妙に誠実な、妙に規則正しい、妙に融通の利かない、妙に先走っている、妙に自分を認めたくない、そんな自分のことを、ゆるやかな展開で書き残している、そんな印象を受け取った。集中から「異界へ」。

うすぐらい一人きりの部屋で

時代の熱狂と向きあっていた

つもりだった

内向的なテロリストよ

もつと乱暴にアタシを弄んでよ

力一杯やさしく

もう読まなくてもいい

きみはもつと大切なきみ自身の

ことの中に

帰れ

落ち葉焚き

めらめらとついでに燃やしたき文あり

通報された

焚き火は禁止されていたから

もうこの國はお終いだ

どんな戦場にも

つかの間の静寂が訪れるという

あたりまえに煙草を吸っていたきみが好きだ

時代と寝ない詩を

書こうとしたんだよな  
つまり

普遍的な

きみの青春はそうして終わった  
生涯を全うしたと思ったからだ  
口角が下がり  
手足の静脈が浮き上がっても

意匠を競えばいい  
ちりぬるを

そのようにきみはうつくしい  
いまぼくはほんとうにそう思う

テロリストは一生に一度はなりたいたい職業ではあるが、しかし、そう望んでもなりきれない職業でもある。ひとは思春期を終えると、思春期の毒や傷、あざとさ、卑怯さ、誠実さ、直情性、などを懐に収めて、妙に凡々たる世間に組み込まれてしまう。ときどき、懐に収めているのではなく、忍ばせているというひともいるが、そんなひとも世間の仕組みどおりに歩いていると、いつのまにか忍ばせていた凶器のことをすっかり忘れてしまうものだ。ひとは住民税を払ってスーパーでの買い物を選



7月6日、弘井正プロジュース「第9回」詩の朗読と音の照明」が細木ユニティ病院6階ホールでおこなわれた。今回は、西岡寿美子さんのあたらしい詩集『すゞれる』を読ませていただいた。朗読は松浦満さん、ピアノは前田侑里さん、打楽器その他は東雲東風さん。体調のすぐれない西岡さんにも来ていただいて、盛況だった。来場者のみなさん、ありがとうございました。すゞれる、というのは徐々に崩れ落ちるという意味の土佐方言らしいが、ぼくらの世代はもう使うこともない。そんなふうに、土地に根ざした言語も徐々にすゞれていつている。

先する。生きていくということはそういうことだと自分にいいさせて。

しかし、テロリストは職業にはできなかったが、テロリストでありたかったというアマチュアリズムをいまだに抱きかかえているひとも、たぶん、いる。かれらの「もつと乱暴にアタシを弄んでよ」という思春期の断末魔のような声は、世間の滑らかな風のなかに消えていってしまうのだろうかとおもいながらも、「きみはもつと大切なきみ自身の／ことの中に／帰れ」と、テロリストの本分にたどり着けないかと、ささやかな「異界」を維持しつづけている。

テロリストは、時代が作りあげた制度や規範とはけっして寝ない。みずからの倫理と思想に添い寝するだけだ。

富沢さんは、そんなテロリスト志願者、それは、富沢さん自身であつただろうけれど、テロリスト志願者の「つもりだった」誠実さと呼び戻し、「生涯を全うしたいと思つて青春を終わらせたひとたち皆に、完全なテロリストでなくても、意匠を工夫しながらテロリストの断片を吐きだしていれば、だれか、それらを繋ぎ合わせてくれるひとが現れるだろう、やがては「ちりぬるを」だろうが、テロリストの青春を終わったすべてのひとたちの再現を見届けてみたい、と富沢さんは、自分への期待もこめ、みんなうつくしい、といっている。

富沢さんの一冊を読みながら、この作品がいちばん富沢さんの無念と希望を描いているのではないかとおもった。テロリストは自分自身へのテロを最終目的にしているのだから。

いま、日本は少子化とかで、どんどん人口が減っていると危惧されている。今後は老人介護の場で外国人労働者、あるいは、ロボットの活用が求められている、なんてニュースに接すると、老いていくだけのぼくは、いざというとき、どのように自分の身を処理したらいいのだろうか、と考え込んでしまうこともある。まあ、それでも、いままで成りゆきで生きてきたから、これからも成りゆきで生きていくしかない、計画をたてても計画通りにいくことはけっしてないんだからと、自分に言い聞かせてみるだけである。「他人に迷惑をかけないで死んでいきたい」なんて神妙なことをいうひとがいるが、死ぬということは生きているとき以上に他人に迷惑をかけることだとおもっていたらいい。

ひとが死ぬということは、都会では個体の減少ですむかもしれないが、高知のような田舎では、集落の消滅に繋がってしまう。高知のような田舎県はかつて、高度成長期には都会への労働力の供給県であった。いまでは、すゞれていく村には商店もなく、病院もなく、子どもたちや孫たちは、教育のため、就職のため集落を後にする。集落の活性化を図るなど考えられない。

先日、NHKのローカル番組で、高知の大豊町の怒田地区に若い夫婦が農業をするために住み着いた、と話題になっていた。怒田地区は高齢者が7割を占め、ここ20年で人口が半減した限界集落だとのこと。そんな集落に25歳と23歳のカップルが農家になりたいと移住したらしい。地区は大喜びで20年ぶりの結婚披露宴を祝った。TVでは雑草の刈り方から教えてもらっているシーンを挟んで、集落総出でこのカップルを育てていこう、というNHK好みの、明日に向かって種をまこう、的な締めく

くりをしていたが、「この一組だけでなんとかなるわけでもないだろうに」とつい、ぼくの性格の悪さが出て、そうつぶやいてしまった。それでも、都会では株を操作して何億円、あるいは、ネット事業で何億円儲けたと、金を稼ぐことが「偉い」とされているが、すぐれていく限界集落に住み着くことのほうが「偉いぞ」とつい、おもってしまった夜でもあった。

何年前か前、NHKの番組で、東京のIT企業が業務の一部を徳島県の小さな村に移して、東京から社員を送り込んだ、というドキュメンタリーを見たことがあった。ネットでの業務は場所を選ばないのだ。

村民の高揚感とは裏腹に、東京からやって来た若い社員は「なぜこんな田舎に」というおもしろいがありの態度を示していた。いわゆる、ダラーツとした態度で車を降りてきたのだ。なんで、こんな田舎に???

マンションではない、襖で仕切った畳部屋。寝ていると虫が這ってくる。朝早くから村民がやってくる。取れた野菜を持ってきてくれるのだが、かれらは昼まで眠りたい。最大限の苦痛は、村民との会話だった。ネットの世界で生きている若者に、老人たちとの生な会話は苦痛でしかなかった。それでも一年ぐらいだろうか、勤務を終え東京に帰っていく。そのころには村民との会話もなんとかこなせるようになった、というような締めくりだったが、それはNHKお得意のヤラセで、ほんとうは、この田舎を離れられる喜びしかなかったし、こんな村には二度と来たくない、とおもっていただろう、と見終わったことがあった。

経営者は、田舎に仕事を持っていけば、経費も安くすむし、

社員にも都会にはない（貴重な）田舎暮らしを味あわせることができるし、田舎の生活を楽しんでほしい、とおもっていたかもしれないし、もしかしたらこの経営者は徳島出身で、地元にも貢献できる、とおもっていたかもしれないが、田舎での村民との濃密な関わり、それも、永住するわけではなく、たった一年ほどの関わりを強制された若者たちがすこしかわいそうにおもった。田舎暮らしのむいているひとと、むいていないひと、ひと付き合いにむいているひとと、むいていないひと。

たぶんかれらはパソコン相手の無機質な仕事環境を前提に就職しただろうに、虫の這う畳部屋に放り込まれ、朝早くから食べたくもない新鮮な野菜や果物を持ってこられて、興味のない話題を延々とくり返す老人たちに辟易して、都会へ帰れる日を数えながらの田舎暮らしではなかっただろうか。

いま、いろんなところがすゞれようとしている。かつて文明はさまざまな原因で減んでいったのだが、この文明はもしかしたら、ひととひとの関係、ひとと土地の関係、そんなふうに関係性がすゞれることで減んでいくのではないかと、西岡さんの詩の朗読を聞きながら、そんなことを、チラツとおもった。

公演の後はいつものように居酒屋「トンプー」で。まあお気楽に飲んで語って騒いで、の三時間でした。来ていただいた方々、お疲れさまでした。まあ、すゞれないで、もうすこし生きていきましょ。